

## 二十年の回顧

一。光明団がやっと二十歳になりました。八月一日から一週間、我らは、真劍精進、無我報謝、不退求道の記念講習会を開催して、金剛不壞の真心の獲得、永遠不朽の大道の顕示、信火の坩堝るっほに身心を投じて、至恩に報ずるの実をあげんとしております。

一。この二十年間、私は量り知られぬ尊いみ法を頂いて来て、何たる幸せ者であろうかと、内からこみ上げて来る熱いものを感じないではいられませぬ。よい時に生れさせて頂いた、よいお国に生れさせて頂いた。何もかもよかつた、有難うございました。お念仏の中に御恩のあふれることであります。

一。私が今一番に思うことは、一筋の道を歩みきらして頂いたことであります。これは決して私の力ではない、「私の力」では続かないのであります。又続いたとしても、それは決してありがたいことではない。お他力のおん催しは、たとえば噴水の如く、本願力によつて自然に押し出し、成就して下さるのであります。重い足をひきずつて名利などを希望に持つて、貪欲の幻影を追うて歩むのでなくて、一切の肩の荷物を取つて頂いて、教命のままに歩ませて頂く、足の軽い歓喜踊躍の道であります。

一。聖教の言は、時には都合の悪いことに聞えたり、あるいはそんなことは出来ないと思われたり、御聖教の言よりも世間の雑音が強くひびいたり、よいか悪いかわからなかつたりすることがありますが、一言でも一句でもその通りを頂いて歩ませて頂くと、その真実が身にしみて下さる日のあることを、たくさん頂戴いたします。

一。今から十年も前、日本の国はまことに寒心すべき思想に、ほとんどの学生や知識階級で感染しない者はないというような時がありました。宗教などは無用の長物どころか、人間に阿片の毒を飲ますもので、やれ我らの敵だ、逆立ちした奴だ、とものすごくやられました。そして私の周囲など一番その声で満ち、大変な非難の声で埋められました。しかし「夫れ真実の教を顕わさば則ち大無量寿経是れなり。」この聖人の御一言をどうすることも出来ないで、辛いままを歩ませて頂きました。気の早い人は、それに早変わりした人もありますし、仏教の中にそれを織り混ぜて、先覚者のように歩んだ人もありました。しかしそうした人は、悲惨な結果となったようでありません。

ああ、よかつた。ほんとうによかつた。順境も逆境も、まがらずくねらず、一筋の白道を歩ませて頂くのが一番よかつたと、衷心思つて感謝せずにはいられません。もし一歩誤つていたら、多くの人に御迷惑をかけていることであります。

一。何も求めずにみ法を求めること。結果を予想せずに、み法によつて内に充実して頂くこと。内の通りに外がなる。

□□君は、私の留守に××君につれられて本部に来ました。そして弟から話を聞いて、昨年の春の講習に一週間精進しました。その間ほとんど泣き続けて過古を懺悔し合掌していました。家に帰ると仏前に合掌し念仏し、母親の前に手をつけて泣いて長い間の不孝のおわびをしました。彼は黙々として田畑に立上りました。昨年末から本年へかけて、少しでも赤い人は一人残らず連れて行かれたのに、その村での一番の人であった彼は、どうしたことか一人何のこともなかった。母上は涙にむせんで礼に來られました。真の念仏道は往生成仏の一道はもとより、それがそのまゝ忠であり、孝であることの尊い実証の一つであります。内の通りに外がなる。信があれば浄土の門が開ける。

一。人を得ようとしてはならないと共に、人に溝を構えてはならない。人を得ようとしてはならないとは、どうしてでも自分の味方や組を多くしようとして、人を繋ぐこととするのであるし、逃げる人を追うことである。そうした汚い心では、一人や二人の人は動し得ても、多くの人は去つてゆく。しかしそれは人生に冷たくなれというのではなく「離合集散は因縁による」との祖訓を頂くが故である。そうした心が長い間私を動かしました。そしてそのことは依然として変わりません。

隔執と懇親を超えて、大法によつて結ばれた世界にのみ、同一念仏の世界がありません。そののみ末通ります。たとえ十年一緒に歩もうとも、ただ大法によつてのみ結ぶべきであります。そうでなかった私の過古は大きな傷として残っています。

一のことを言つたが為に去つて行つて、今でも私を敵としていられる方がいる。十程のことを言つたのに、それを受け入れて今ではとても立派な生活者となっている方があります。前の方は私が悪かつたのであり、後の方は、その方の意いが尊うかつたのであります。

一。私の世界には、それはくたくさんの尊い念仏の行者を頂戴はした、しかし私は一人も人を救つたことはない。ある日二人の青年に逃げられて、いよくこの念を一層深く味わされました。

一。人の一生は命の捨て場所の見つかるまでのものがぎです。一死奉公、専修専念の世界が見つかるまでは、生きるということとは成り立たない。生きんとすれば死ぬること、死ぬること。

一。ある人は人生をすらく通れるし、ある者は複雑な人生を歩みます。私などは後者に属する方でありましょう。人のことはわかりませんが、私にとつての人生が複雑であつたことは、私の宿業の重いことを意味するものであります。宿業の重いということは、無明の深いこと即ち愚おろかであつたことでもあります。お念仏申しつつ、よく考えてしなかつたこと、後のおおるべきことは何時もそれから生れて来たようであります。悔ゆるとか懲りるとかいうことは、凡夫が自らのしたことことで手を焼いた場合をいうのでありましょう。私のそうした数々はとうてい書き得ないことであります。

一。しかし私には、如来聖人のみ教が何時も私の心を打つて下さいました。したがって私には柵の上にあげておく仏法でなしに、その時々に心を打ち、養つて下さるみ法でありました。そしてみ法は、豊らかに念仏の内容となつて下さつて、いよいよ念仏のみが真実にておわしますこと、真実のみ末通るということを、魂に打込んで下さいました。真実のみ末通りたもう。私に真実が微塵もないことがわかればわかるほど、不思議に真実のみ光つて下され、真実のみ末通ることを信ぜずには生きれぬことにして下さいました。

一。真実のみ末通る。それは無条件の一大事であります。「それはそうだ。真実が末通りはするが、しかし世間というものは」と、何とかしてこの唯一絶対の命題にただし書きをつけようとします。しかしこの真実に対するただし書きをすべてとつて下さるのが仏智であります。微塵のただし書きを許さぬのが真実であります。ただし書きをつけるのが、生きるのに楽であるようで、決してそうではありません。無条件に真実の一貫を信じきれるところにのみ、托しきつた安らかな生活があります。ただし書きをつけてそこに隠れて自分の不法懈怠を許そうとする横着さが、私を道の人とならないのであります。私にしてみようとした疑惑があるならば、それは本仏の真実に対する疑惑であります。真実に対してただし書きを入れる心は正法の言々句々に對してただし書きを入れる心であります。

「光明団の人を見よ。まるで仏法を修行と想うておる。あれはどにせいでも、極樂にはまいられる。」と、いわゆる世のお同行はいう。確に私どもは仏法は修行と信じさせられている。如実修行相応とありますが故に。お食事の時、合掌して頂くのを見て「あのようなことをしておつては、熱いものでも冷える。」と罵倒し、自らは世界一の念仏行者の如く振る舞うていた老婆は最後には、家族への憤怒で縊死をとげました。ただし書きを入れる心には、正法は直接に、メスとなつて心に当つては下さらないのであります。

一。人はよく、真実のみが末通るということを、真実からはよい報いが来るといふこと、不知不識の間に混同しています。それは考えて見ねばならぬことでもあります。古往今来、真実が曇つたこともなければ、真実の前に碍さまたげがあつたこともありません。真実が末通るとはこのことでもあります。

しかしそれは、真実に乗托し、真実に安住した者が、人間的な幸福を恵まれるということとは別であります。真実が末通るためには命すら捧げなくてはならない。昔より、真実の行者、即ち聖賢は一生を不幸の底に沈んだ人もあれば、流離の巷に泣いた人もあります。それでも、真実の一道を捨てず、真実のみ声のままに歩みきつたのが聖賢でありました。

真実が末通らぬように見えるのは、貪欲によつて眼がくらむからであります。播いた種は、間もない中に実つて来なければならぬ。今、信ずれば、その日から御利益がある。今、行ずればその場から効果がある。更に一歩進めば、御利益があれば信じ

てもいい、行じてもいいと、因果を顛倒して、結果から先につかもうとする、そこに凡夫の功利的な歩み方ははじまって来るのであります。その時、眞実は遠くこの人より去つて、ただ輪廻の迷妄のみが残るのであります。迷信邪教は、そこに巢喰うのであります。

一、今日生きた道からの報いが、千万劫の後に来ようと、否、更に永劫に報いが到来すまいと、これより外に歩むべき道がない。そこに至つて、如来の本願は静かに心に聞えて下さるのであります。証卷の『論註』の御文に

「是の故に彼の安樂浄土に生ぜんと願する者は、要かならず無上菩提心を発すなり。もし人無上菩提心を発さずして、但彼の国土の樂を受くることひま間無きを聞きて、樂の爲の故に生ぜんと願するはまた当に往生を得ざるべきなり。是の故に自身住持之樂を求めず……………」

とあるのは頂戴しなければならぬ御文であります。

一。しかしお念仏の一道は、外から報いられないとしても、その中に報いられ充されきつて十分であります。報謝の生活は満足からのみ生れることであります。ましてや如来は数えきれぬ大利益を廻向して下さるのであります。私はただこのお恵みにのみ生かされて来ました。

一。世の中に嫌な存在は、自分の立場を明瞭にしない人であり、こらもり「鳥無き里の4蝙蝠」とは、自らを知らぬ高慢の喩でありましょうが、それと共に、鳥の喝采を求めゝる為には鳥と見せかけ、獣となつたが便利の時には獣だという人、四方八方、地獄行きにも、浄土の人にも、一切からほめてもらいたい人、悪く言われたくない人、つまり名利を命にしている人であります。この人は眞に仇敵となつてしまふ人よりも、不眞実であります。

たとえ悪人でも、教えに忠実で、打てば響く人は必ず尊い存在となります。それは、如来の尊さによるのであります。しかし、肥えたかに見えて腫れている人、内には名利の水を充たし、一見念仏行者の相を示しつつ、如何なる教えも肉をささず、骨髓に銘ぜず、当然右にゆくべくして左に行き、前進すべくしてとゞまる人であります。この人は仏教が指導原理ではなくして、仏教を利用してこの世を渡ろうとする人であります。こうした人とも必ずお別れが来るようです。

一。けれども私は、眞実を眞実とし、大法を大法として忠実に歩みたまう尊い御同朋御同行を数限りなく拝ませていただいたありがたきは、如来による地上最高の賜でありました。お念仏のうちにあるがたく死ぬることが出来るのは、恐らくこの大地の尊い白蓮華を拝み得たことにも、その大因のあることを痛感いたします。

ある僧侶は、腐敗した仏教界を憤慨して、これを改革しようとしたが、一人の友なく、一人の共鳴者なく、ついには、「子等よ聞け 父はこの世を泣きにけり、正法高くかかげんとして」との歌を残してこの世を去られたということであります。私には

この歌がわかりつつ、しかもこの歌の不要の世界を知らして頂きました。あまりに多くの友を頂いたからであります。

一、大衆は一見動かぬものであり、大法の重きを荷<sup>にな</sup>負わぬもののように、実は如何なる正しく厳しい大法の重きをも、これを受取って忠実に歩むことを以て最大の喜びとするものであることを、有難くも知らせて頂きました。

一。私は講演の時、特に講座の時、沢山な人が集ることを嫌います。私とてもあなたがちに大衆を嫌うのではないのです。その昔、大衆を動員しようとしたことがありません。しかしそれは宣伝であつて、真の仏道ではなかつたのであります。真の仏道とは信の人の生活でありました。一人一人の方に成就される深い念仏生活のことでありました。一宗の繁盛とは、威の盛んなることではなくて、信心の人の出来ることでありました。したがつて私は、私自身深く、仏の教を頂戴しなくてはなりません。そして私の前に現はれた人と共に頂戴させていたゞきます。

何時しかに、どんな人でもが、尊い人、絶対的な存在と買わずにはいられなくなりました。

一。二十周年記念の講習も式典もすみしました。私はこの式典と共に、二十年の過去を大地の底に葬つてしまいます。そしてそれを、踏み台にして、一歩から出直すのであります。問題はただ現前の精進にのみあります。「最初の日」それは誰にも嬉しいも5なのであります。朝の心であります。明治天皇御製「さし昇る朝日の如く爽やかに持たまほしきは心なりけり。」しかしそのままに最後の日であります。

一。私の過去は、かなりの苦闘でありました。八方塞がりに見えた時がありました。苦しい道を通つたのは私である。そう思つていましたが、今考えると何でもないことであります。今現に、私の前には、業苦に泣くあまりに多くの同胞がいるではないか。念仏の身に重い業苦を背負いきつてけなげにも精進している同胞がいるではないか。それ故に、私の心は暗くなります。胸の底に涙の淵が出来ます。

同胞よ。どうか大法の思し召すが如く、合掌念仏して忍びきつてくれ。道は必ず開けるから。

一。大君の御恩、親の御恩、衆生の御恩、三宝の御恩、四重に敷きつめられた御恩の錦の上を歩ませて頂いているのであります。御恩に頭を下げれば下げるだけ、御恩を蹂躪<sup>ふみぢ</sup>っているのは私であることが知られます。念仏申すこと二十年、ありがたい国に生れさせて頂いたものであります。

一。悪業の重い私は、とても懺悔録など書いて公にすることも出来ない、到底言うに忍びない、悲しい日、恥ずかしい日、苦しい日がありました。その時、「光明団もやめてしまおう。とても世間に顔出しも出来ぬ」と思つた日が幾度もありました。その

時、その時、私の心の底にはどうしても聞かすにはおかぬと、待ちに待っていて下さる同胞の顔が現われて、どうしてもやめさせませんでした。そして、今日この頃、つくづくやめていないでよかったですと思われれます。やめていたらこの尊い同胞を知ることは出来なかつたことであります。

一。どんな人でも、素直に大法さえ聞くなれば、必ず尊く光るものであることだけは真実であります。その人の尊いままが、弥陀の尊さであります。弥陀の尊さであるが故にその人が尊いのであります。

一。損をすまいとする人は損をします。ただ、忠実に大法を聞信して、我にものを云わせず、御法にものを言はせて、己を御法によつて充実することに急がねばなりません。如来は決して損をさせたもうことのないお方であります。まことに大法は、自利利他一如に成就された功德の大宝海であります。これによつて満願させて頂く世界であります。

大法の中で算盤を弾く人の周囲には、算盤を弾く人しか来ないのであります。仏法の中で名利を追い、名利の為に恐れてひるむ人にも、命をささげて助ける人は出ないであります。皆、損をすることをおそれ、嫌つて、かえつて損をする人です。永劫に損をする人です。重ねて言います。み仏は決して損をさせぬ方です。

一。短い人生であります。ただ今日一日が大事なく、日であります。私はこれから真に聞いて下さる方のところへのみ行くであります。会の行事や、寺の政策のため講演会や、そうしたところには行けないであります。私自身が大法を求めさせて頂き、希有華から希有華への巡礼という勝手な行動に出るかもわかりませんが、どうかお許し下さい。私の意は、記念式典の奉白文の中にあるが如くであります。